

禅の友

2018
12

—Zen no Tomo—



特集 成道会

禅めぐり 青森県弘前市「長勝寺」



理髮屋の鏡の中を御輿かな

茨城県 鈴木 米征

評 町中の祭の様子であろう。本人は理髮屋で髪の毛を切ってもらっている。その様子を鏡で見ていると、自分の後ろで御輿が担がれて過ぎてゆく。面白いのはドラマの一場面のように動画として見えてくるところ。

送り火やもうすこしだけここにゐる

埼玉県 中島由美子

評 身近な人の送り火がもう尽きようとしている。しかし、まだ亡くなった人が居るようでここを去りたい。句の中七と下五をひらなにしたことで、なんとも優しく切ない心持ちが表現されている。

◆金魚の朱行つたり来たり人を待つ 東京都 長谷川 瞳

◆天高し蟲貞力士の土俵際 三重県 刈屋奈良美

◆結界に入りて深まる紅葉かな 東京都 瀬沼 利雄

◆堀割に浮ぶ川舟水の秋 山口県 御江 恭子

◆人の世に背骨を向けて三尺寝 千葉県 甲斐 勇

◆少年の山羊曳きもどる月見草 福島県 大槻 弘

◆無縁墓寄り添ふあかり彼岸花 島根県 俵 保恵

◆花イペー木漏日あびて夕暮に サバゴ 斉藤 明子

◆群れコスモスひとり咲くのは淋しいか 岩手県 熊谷美智子

◆老僧も傘とタオルの盆回り 静岡県 末光 愛正

*選者吟

金輪際恋などはせず稲を刈る

俊 樹

*作句小見

「金輪際」とは仏教用語から来ているが、この場合は「二度と」「断じて」ほどの意味。俳句はこのような措辞によって逆にユーモア・諧謔をねらう場合もある。どちらかというど女性を思うのは作者だけか。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

テレアナが熱中症の警告を津波警報の口調にて言う

千葉県 富野光太郎

評 今年の夏の暑さは記録的であった。多くの人の命を奪う恐れのある津波と同じレベルの警戒度で、熱中症の予防を訴えるアナウンサー。その声調の緊迫度を伝えて、ユニークな一首。坦々とした語り口にリアリティーがこもる。

母の呼ぶ声かと紛う風の音に真夜を覚めて

は眠れずにおり

福島県 大槻 弘

評 母上を亡くされたばかりの作者の心情が、真夜の風音に託されて哀切である。いきなり初句で「母の呼ぶ声」と核心に迫り、読者の心をつかむ表現の巧みさを感じた。

◆北限の小袖の海女の掌てのひらに余る海胆上げ拍手を浴びる

岩手県 関合 新一

◆鐘楼の落成祝ふ寺の昼こげらにあらむ幹うがつ音

広島県 徳永進一郎

◆水遣れど水を遣れども枯れてゆくいつしか自分が疲れ果てをり
京都府 小林 靖子

◆夕ぐれに訪ひ来し友と口つぐみ黒き揚羽の舞ひ姿追ふ
岩手県 阿部 潤子

◆物忘れおぬしも一役買っている茗荷を乗せた冷奴好き
奈良県 鈴木 重雄

◆公園のトンボの群れへ自転車で突っ込んでゆく口あけたまま
福岡県 三吉 誠

◆大西目ぐらりと落ちて燃ゆること夕焼空のしばらく残る
東京都 長谷川 瞳

◆飲んだかな飲んでないかなこの薬しばらく迷い情けなくなる
東京都 野村 信廣

◆島国の島のそのまた島に在る嬬の明るき奥尻の宿
秋田県 小松 紀子

◆星招き人呼び込み盆踊り静もる峽に賑わい戻る
鳥取県 眞山 博充

*選者詠

片耳はわたしのために立てながらも片方で風をきく犬
ちづ

*作歌小見

関合さんの一首は、北限の海女として知られる岩手県久慈市小袖海岸のウニ漁の様子が詠われています。ウニの大きさが「掌に余る」に端的です。三吉さんのトンボの群れへ自転車で突っ込む歌も結句がユーモラスで楽しそうです。



大本山永平寺



調心ちようしん

永平寺では、十二月一日から八日未明にかけて、お釈迦さまの成道じやうどうをお偲おほしびし、坐禅修行にいそしむ、「臘八摂心ろうはつせつしん」を修行いたします。

この「摂心」の間は、寝ても覚めても坐禅三昧です。

道元禅師さまのお師匠さまである如浄禅師さまは、坐禅の時、心を掌の上におくのがお釈迦さまから伝わる坐禅の作法だとお示しです。しかし、心は体から取り出すことはできません。どうしたらよいのでしょうか。

その方法は、調身ちようしん・調息ちようそく・調心ちようしんです。調身とは、姿勢を正すことと安らかに坐ることです。調息は、ゆっくりと必要なだけ呼吸をすることです。そして、調心ですが、「心」は、水のように形のないものですから、器の中の水の如くに、器となるこの身やその息などを調えることそのものです。

道元禅師さまのお歌です。

「心とて ひとに見すへき色そなき

ただ露霜つゆしもの むすふのみして」

水は、結ばれる縁によって、波が起こったり、露や霜となり姿を変えて現れます。心もまた等しく、ふれあう縁に随って様々に変化します。様々な思いを掌の上において、只静ただかに坐る時、みな等しく仏さまの心のうちにあるのです。

摂心の終わりには一同に仏殿に集い、おつとめをいたします。

(上写真)

ご本山だより



大本山總持寺



成道会法要

一年の締めくくりに

十二月は臘月ろうげつとも称し、「臘八摂心ろうはつせっしん」を修行するとても大切な月です。臘八摂心では、一日から八日未明までひたすら坐禅三昧に徹します。八日はお釈迦さまがインド・ブツダガヤの菩提樹の下で正身端坐しょうしんたんざしてお悟りを開かれた（成道じょうどう）日で、お祝いの「成道会」法要を勤めます。

さて、本年も残り僅かとなりました。皆さまにとりましては、どのような一年でしたでしょうか。本年は年明け早々に北陸を中心に大雪が降り、その後全国各地で記録的豪雨による水害や土砂崩れなど自然災害が多発しました。甚大な被害で多くの方が犠牲になり、また不自由な生活を余儀なくされています。

来年こそは、自然災害が少なく人々が安寧な生活を送れますようにと、ひとえに祈念するばかりです。

總持寺にとりましては、来年はいよいよ石川素童いしかわそどう禪師百回御遠忌の年です。石川禪師は總持寺を石川県から現在の神奈川県横浜市に移転させた大功労者で、「中興ちゆうきゆう」の称号を贈られています。

その百回御遠忌の報恩法要は、十一月三日から五日にかけて行われ、さまざまな記念行持も予定されています。

また十月には約二年半かけての紫雲臺しうんたい保存修理工事が竣工し、再び壮麗な姿が復活いたします。

大本山總持寺／045-581-6021